生物学的に見た「恩」の社会構造（新しき世界へ 1971 年 10 月号）

桜沢如一先生誕生 78 周年記念
1893.10.18－1971.10.18

一新しき世界の原理篇一
一オモシイ、ありがたい、スバラシイ、楽しい一
一生を送らないモノは、アワレナ排他性のエゴイストである。ナゼ多くの人がツマラナイ、カナシイ、クルシイ、ナサケナイ、ミジメナ渡世やドレイの一生を送らねばならないのか?
　そのわけをココに究明する。

　生物学は生理学に先行する。
　生物なくして生理学はないから。
　生物は地球なくしてはありえない。だから地理学が生物学へ先行する。しかし現在の地理学は人間の利便のための地理学であって、地球－生物、生命の場としての－の学ではない。オマケニ、国家領土思想にワザワイされている。古来の地文学や中国の自然観察の正しさを思う。
　地球学はモチロン、天文から宇宙学に進まねばならない。最後には相対有限界から無限、絶対界にたどりつく。そして生理、生物学から無限絶対までを貫く唯一無疑、万世不易の法則－▽△実用弁証法の発見になる。
　これは私の宇宙スパイラルに完全に描写されている。生物学から生理学、心理学、人間の世界と下ると始めて幸、不幸というモノを発見する。だから幸、不幸、自由、不自由、吉凶、善悪の問題の根本的解決は少くとも生物学的原則」の発見にまでさかのぼらないと得られない。
　ところが、現代の━つまり西欧的な生物学は生物環境学(ビオエコロジイ)まで進歩しているけれども、ヤハリ主流は西欧的でむしろ分析的な生物物理学のキカイ論になって、多岐亡羊の観がある。肝心の人間が行方不明。その死角は一言にいえば宇宙の構造・秩序=恩の思想のカゲもないコトである。空気、水、日光、大地－これが生物と生命の場であり、これが人生劇場の舞台である。
　これがあるオカゲで一切の人生の悲喜劇が上演される。だからこのイミの生物学的認識さえあれば、オモシロイ人生劇のシナリオ作者になって、人は自由に自分の好むままの演出ができる。つまり役者にならず、作者になれる
　さもないと役者で、しかもその九十九%九九九九はエキストラである。この光、空気、水、大地(昔のコトバでいうと地水火風の四大、あるいは空を加えて五大)の秩序と、根源と法則を知る事が人生、生物学の第一課である。ソレを西洋生物学は全く忘れて、この四大または五大が生じる無数無限無常の千変万化する映像を集めて、根本原則を見出そうとしてい

る。ここに西洋風な全ての考え方や科学の死角が露出している。これは落葉を集めて、森を再現しようとする努力に等しい。

東洋流なモノの考え方では、第一にそれらの起源を探究する。そして絶対、無限、永遠、一、空(神)などの発見に到達する。それから、数千億年前も、今日も、数千億年後も、刻々にこの五大を創造しつつある大本の偉大さ、想像を絶するモノ、(老子はコレを谷神、とか母とかいった)エホバ、アミーダ、神、シュンニャ一タ、プラーマ、ア一タマ、など呼ばれるモノに至り、ソコに絶対の信頼、安心、平和、ヨロコビ、感謝、感激、法悦さえ、発見し、定住するコトになる。

この考え方を知恩という。

(恩とは因を心の上にかいた字。因はスベテノ原因すなわち宇宙の秩序とその唯一の法則すなわち正義▽△を心に抱いているヨロコビの象形である。)つまり東洋の生物学は恩の生物学である。つまり、光、空気、水、大地という人間にとって一秒も欠く事のできない場を無始の始めから、無終の終りまで刻々生産し、変化させ、破カイし、また創造してゆく偉大なモノ－宇宙の秩序－に対する感謝、感恩、大歓喜、欣喜勇躍の境地が東洋生・物学の終着点、である。そこから第七天、無限界の楽しい旅が始まる。一口に言い直すと東洋の生物学は恩の世界への門である。(家の建築を見ても分るように、東洋では人間の生命の根元、大宇宙とその正義を日夜愛し、とけこみ、楽しむコトを主眼とする芸術的作品であるが、西洋では、その物量、材料、大小、快楽、利便をネライとし、外界、自然を敵視する排他性の表現である。)

敗戦亡国の日本のアサマシイ、ナサケナイ、オソロシイこの現状はこの恩の世界の完全な喪失である。

現在の日本人の忘恩ほど大きい不幸は空前である。モーダレ一人、この宇宙の偉大な生物学的な恩恵を感謝することを知らない。ただその恩恵の無限分の一である感覚の世界の 1 コマでしかない肉的快楽を必死の形相で競い求めている。ソレくらいだから当然社会の恩恵も無視してしまう。ここに現代日本と世界の最大の不安、相剋、斗い、戦争、恐怖、暴力、新兵器、危機の根本原因がある。宇宙の秩序という大きな、見えない恩恵に対しては盲目無知でもフツウの人間は社会の、トナり人の、直接の日々の恩恵にはダレでも感謝と報恩の行動をとる事、とらねばならぬ事を、教えられなくても知っていた。ノレは常識や習慣になっていた。

借金に利子をつけたり、訪問に花をもって行ったりするのはそのためである。(カゴシマでは不意の珍客の訪問をうけるとアトカラ、訪問者へ茶菓酒肴に相当するモノを届けて、訪問を謝する風習さえある。)オミヤゲという古い一般的な形式の贈物は日本人のこの美しい社会認識の心情の表現である。

これは平素の宇宙の秩序の大恩に対する、社会に対する、人に対する感謝の最も幼稚な初歩的表現の一つである。私はイツも欧州へ出かけるごとに身の廻りの手荷物と同じくらい、またはシバシバそれより大きな量のオミヤゲをもってゆく。

一九六〇年七・八月、私は毎日毎日二十時間位九週間も米国における第一回のキャンプのためにはたらいた。(リマや、その他二、三のMI出身者も)。ノベ数三百人以上であるが、お礼はスベテノ人件、食料、家賃(八十万円)を払った残金ワズカ三百五十ドルだった。

(フランスでやった時にはお礼はゼロだった)。

(参加者の会費はニカ月で〈一人〉六百五十ドル=約二十四万円)。私はその三五〇ドルをリマを交互に助けてくれた四人の日本女性のために分けた。しかも私はこのキャンプで正食実行によって偉大な効果(ガンを治した)をあげた四人の米国の女性に無双塔の純銀特別製ネックレス(東京丸ビル宝屋宝飾店謹製)を贈り、その他三十名にイロイロな記念品を贈った。その金額は五百ドル以上。これでも私のヨロコビを表現するにはたりない。もっと贈物をしたかった。

しかし、私とリマは生命をささげている。他に何事もやらないで、夜明けから、夜半まで、(六十数日間に二回海へ行っただけで)毎日講義やその準備や、料理のためにはたらいた。そして何十人かの人々に健康と美と若さと最高判断力、生命のカギ、天国のカギを上げた。一人の生命を百万円と見ても莫大なモノである。だから、この五百ドルの贈物などは問題にならない。しかし、欧州や米国でのキャンプで私は一介の労働者の一日分の収入もないコトにはなれている。これは欧米の人々にとっては、無双原理や正食という生命の芸術、仙術、神の医学は始めて接するので、ただボウ然とするばかりであり、その真価を理カイできず、したがってその師に対する礼を知らないのだから当然である。収入がゼロであっても、中傷や密告をうけなかったらマダありがたい方である。スイス、ベルギー、フランスでは、再三、ケイサツや法廷に引っぱり出されたコトがある。

ケレドモ私は私のきめた道をすすむ。

私は人間の無限の自由と、永遠の幸福と、絶対の正義のために、「あそばざるモノ食うべからず」の主義のタメニ、無数のドレイや渡世人を解放するタメニ、私は私の史上空前の人間革命のために、最後まで戦う。

私のネライは宇宙の秩序という最大無上の恩寵の発見を人に説くコトである。ソレよりほか、永遠の幸せと平和、無限の自由と絶対の正義をこの地上に確立する社会を創る方法はないのだから。つまりユートピャは人間の住んでいるこの世界、「今」の世界にあるのだから。また、あったのだから。これを忘れているスベテノ社会改造による革命の失敗したのは当然であるから。

この宇宙に無限に湧き出し、みなぎる無限大の恩寵のヨロコビを見る眼のない人はミナ、金や、力や名誉によって、小さなタマユラの快楽やヨロコビを求めて悪アガキをつづけている。ソレが人間の数千年の悲惨な歴史である。

この無限の恩籠を発見したヨロコビこそ感謝であるが、これを「アリガタシ」「難あり有り難し」という日本語ほどヨク現わすコトバは世界中ドコにもない。宇宙の秩序のスパイラルとその法則▽△はホントー二「有りえ難き」モノである。この「ありえがたきコト」を発見したヨロコビの絶叫が「ああ、ありえがたきコトだ!」である。「ありがたい!」の絶

叫は心の底から全身全力をゆさぶって、ほとばしり出る絶叫である。ソレが出る時、人はモーこの相対、有限、無常界の一切をなげすて、天国に生れ変ったオドロキとヨロコビ、無上の法と永遠の命を発見したヨロコビ、神を発見し、自分の命の母を発見し、自分にスベテを与えてくれた、くれつつある母を発見したヨロコビ、全地球より大きな宝―魂―をくれた母、自分をアケクレ守っている神を見る眼を開かれたヨロコビにつつまれているのである。

西欧のコトバでは「感謝」は一つの反対給付である。メルシィにしても、サンクスにしても、ダンケにしても要するに「汝に神の加護があるだろう」とか、「あるコトを願う」の意である。あるいは「無形の音だけの空手形」である。ソレは一粒万倍の全く逆の精神の露出である。「アリガタイ」は最大、無限の「ヨロコビ」である。西欧人はこの意味の感謝を知らない。

第一、コトバがない!!!!

西欧の人々は光、空気、水、大地を、また生命を無償で与えられた光栄とヨロコビを知らない。だから、生命を知らない。知らないコト―無知は恐怖を生み、恐怖は敵対心を生み、ツイニ、暴力を生む。その暴力の最大なるモノがカレラの神である－金、勢力、権威－名声、知識。スベテ相対、有限界(大宇宙の無限、絶対界にくらべると、ソレは大洋とバイキン 1 つほどのチガイのある小さい世界である)この小さい世界にいる三十億の人間の中の一部だけしか通用しないモノである。だから結果は不幸、病気、災難、不運、失敗、犯罪しかない。これで私がこの八年間、莫大な金と、八年という月日と、一日二十時間という努力をかけて、私の過去四十八年の努力で確保してきた天国のカギ、アラユル不治の難病を治し、自由と、平和、健康と幸福、繁栄と、息災の秘訣を贈り、生命をとりとめ、オマケニ経済的にも楽にして上げても多くの人々は宇宙の秩序やノレを生み出す無限、絶対、空に対するヨロコビもオドロキさえもたないのだから。その通訳に感謝をするコトを知らないのは当然である。これは正食と **PU** が、全世界より大きなダイヤモンドの数千億倍も大きいものであるコトを相対、有限界のハカナイ富や力や快楽バカリ探求しているノミトリ眼では見るコトができないからである。

これは私の説明のしかたが未熟で無力であるからである。一体どんなに説明したらいいのか?

これが私の古稀に近くなって発見した私の一生の最大の問題である。私はコツコツこれを掘り下げてゆく。この大問題を他の面から見ると、その大きさがヨク分る。

恩、感謝、アリガタシ、一粒万倍等の思想を一口に「難有り有難し」の一句にこめて、弁証法的に、逆説的に訳してもいい。

これは宇宙の秩序の七則一

(1)ハジメあるモノにオワリあり。

(2)オモテあるモノにウラあり。

(3)同一なるモノあるコトなし。

(4)オモテ(ハジメ)大なればウラ(オワリ)大なり。等一にふくまれている。
この七則は実生活で宇宙の秩序がスッカリ身についた人でないと、分らない。
難の中にこそ有りえ難きモノがある。
不自由の中にだけ自由はある。
不幸のあるところにだけ幸せはある。
不如意の外に如意があると思うほどオロカナことはない!
アラノイの中にこそ平和の原理がある。ソレが分らないからアラソイがあるのだ。アラノイをのがれて平和を求めるのは無用である。アラソイがなければ、相争う二つの主張を相補性に統一するヨロコビはありえないではないか?アラソイや不幸や不自由があるから平和、幸せ、自由を求めるのだ。アリガタイことである。だから、この七原則をヨク理解したモノはアラソイ、不自由、不幸のドン底に自由で平和な幸せな世界への抜け穴を見つけるコトができ、その住民として楽しい、アリガタイ、おもしろい一生を送れる。
親や、社会や、権力や金や法律で無償で与えられた幸福、自由、平和は必ず破れる。ナゼなら自由と平和の原理を自ら身をもって探検し、冒険し、発見したモノでない限り、ソレは創造できないのだから。
ツマリ自分のモノでないから、与えられたモノだから、オソカレ早カレ失う。碁を人の助言で勝ったモノが、自分の力で勝ったと思うオロカサ、はダレにでも分るが、親からもらった富や、学校でもらった知恵や技術や社会からもらった富や地位になると、ヨク、自分の力で得たモノだと思いガチである。ここで「一粒万倍」という生物学的な法則を人間の倫理にした東洋の昔の自由人のエラサを思う。
他からの助言、助太刀も社会の教育もこの「一粒万倍」の原則で万倍にして返さなくてはならない。まして一銭の金でも借りたら。
こんな気持は日本人にはダレでも一応はスグ受けとるが、西洋人にはトテモ六カシイ。
全く「ネ耳に水」である。
アチラノ人々は大なり小なりキリストを愛好する。そのワケは「キリストが命をなげすてて我々の罪を償ってぐれたから」というのだ。
「だから我々は罪を償う要はない」というコトを暗黙の中に認めている。そしてキリストに借金があるとはユメにも思っていない。正に一粒万倍の逆で、「万倍で一粒」か「万倍0粒」である。
「マサカそんなコトを!」と君たちはいうだろう。私も最初ソンナニ思った。しかしコレは実際、私がアチラでたびたびきいたコトだし、またその行動を見て来たコトだ。(外国に行ったらタシカメテ見給え、これが分らないなら、君の西欧を見る目はフシ穴である。)これで、私の開拓する処女地がイカニ凄い暴風雨、大吹雪の荒野であるか、諸君にも分るだろう。こんな態度が西欧人のスベテに大なり小なりあるのだから、聖書で教えているコトが、全部ウラガエシにとられているコトは想像できるだろう。
(例－「汝、家をすて、家族をすて、十字架を負いて我に従え」を七日に一度だけの儀式と

とり、自分の富の千万分ノ１を出すコトを、家をすて、家族をすてるコトだと思い、「もてるモノはマスマス与えられ、富みかつ、栄えん。されど持たざるモノは、ソノもてるモノをもうわまわるべし」を「金をもてるモノ……」と取っている如し)。
(また、信仰を、「ただ盲目的に」信ずるコトととっている如し)

しかし私は最近ガク然とした。モット恐しい事実を発見したのである。ソレは二十五年、も黙々と私について来ていながら、実生活においては PU の P の字も実行するコトを知らない男を発見したからである。

長年の病気や、近く迫っている大きな不幸から救われると、モー東洋医学の原理である実用弁証法は研究せず、尻に帆をかけて消えてしまう人が多い。(例えば「サーナ」にかいた「足ナエ姫」レアンドリーヌである。彼女は、丸七年立てなかった足腰が立つようになり、毎日タカトリ山を上ったり下りたり出来るようになると、会員の家を方々訪ねて食いあらして廻り、礼状も出さず二年後にはドコカへ逃げてしまった。あの娘を治すために、私は生みの親でもできないような世話をしてやった。その後、風のタヨリにきくと彼女は私の友人 Y 先生の息子と結婚した。ソレでもハガキ一本よこさない。何というオソロシイ娘だろう!と思っていると最近大先生が突然亡くなった。彼女が正食を Y 家に入れていなかったセイである。Y 先生の美食邪食は有名だった。惜しいコトだ。これから彼女の不幸は大きくなるバカリである。)

こんな娘や青年にはなれているからたいていの事にはおどろかないが、この男には驚いた。

カレは礼－宇宙の秩序の社会学－の構造を全く考えない。一粒万倍というようなコトをチクオンキのように口にはするが、なすコトはうらはらである。

しかし、これは現在の日本の人々に共通の行動である。今日も新聞に、アルバイト学生の談として、山の遭難者が救い出されても「帰ってからハガキ一枚お礼をよこさない」というのが出ていた。全く一粒万倍の精神は行方不明になっている。

礼とは、恩を知るモノの生活態度である。恩の思想は東洋文明のバンクボーンである。この事については前にかいたから省く。

それは宇宙の秩序の実生活化である。礼と恩は西洋にはない思想である。これを教えている私に二十年も従って来ながらこれを全く知らない男がいたのだから、私は驚いた。

礼や恩は宇宙の秩序を生き、無限の自由、幸福、正義を身につけるという無限大のヨロコビのホトバシリの表現である。百貨店のエレベーター娘の「毎度御来店下さいましてありがとうございます」ではない。だから、これを知らないモノの礼や恩は反対給付一商行為である。

礼、恩の思想はモー地上かち姿を消した。その反対の無礼、忘恩が流行している。一椀のメシを万倍、億倍にし、一生返しつづける大きなヨロコビ、楽しさ—ソレこそ人間に与えられた最大の幸せのバロメーターである－を知っているヤサシイ心、あたたかい心の持主がいないのが今日の世界である。これは質が量を生かす世界のウラ「量が質を殺す世界」

である。これこそおとぎ話や神話の世界、無限の自由、絶対の正義、永遠の幸せの世界のウラの世界である。恩の思想の世界は消えた。恩の思想にたいして盲目の人ばかりの国では、この思想が見える人であること自体がモー絶体無比の幸福者の資格－神－を生きながら身につけていることである。これで今日の世界に幸せ、自由、平和、健康、美を楽しむ人がないわけがよく分る。

追記（一）

　PU 徒のホコリは借金をしない。独立人、自由人であるコトだ。もし借金したら一粒万倍という生物学的法則を守る。人は大地、水、空気、日光を借りている!!!生命という無限大の借方がある。不治の病を石塚左玄の本一冊で治した私は、その後一生をそれに捧げ百万人、否三十億人の生命を救わねばならないと思って私はここまで四十八年間歩んで来た。そしてこの大問題を与えられた。私としては一万人に健康を奪回させたら、一粒万倍の原則を守ったコトになるが、私は無限倍返して、私の貸方を無限大の生命にしたいと思って毎日、暁方から夜半までこの年になってもコツコツ働いている。だから私の七十年はマダマダ未完成である。

追記（二）

　昨夜、追記（一）を書いてから十二時に床についたがソレカラ私はイカニ、ナニをなすべきか、というコトをシバラク考えていた。

　この大問題はホントーに大問題である。

　私はこの大問題に対する回答を次にかこう。これは実行篇である。だから本文は原理篇であった。

(1960.12.23 朝 5 時)光雲閣にて

追記（三）

　幸福とは一粒万倍を生きてゆくコトである。それ以外には絶対ない。

　無限のヨロコビを無限にバラマクことに一生をささげているモノだけが、無限の幸福(健康と自由、幸と平和)の主である。それ以外の人は全て不幸せな排他性のエゴイストである。この無限のヨロコビ(天国のヨロコビ)を無限にバラマクコトをせず、知らずに自分は「幸福」だと思っているような人はアワレナうぬぼれ族である。

　今世界はソンナ人でみちている。ソレだけに、無限の幸せ、無上のヨロコビを身につけるコトは易しいし、楽しい!ナントいうアリガタイことだ!

（「新しき世界へ」No301 より再録)

本文の複写、複製、転載、その他いかなる方法による使用の際には日本 CI 協会にご相談ください